

記譜プロジェクト

「音と身体の記譜研究」

2020 年度活動報告

本研究プロジェクトは「記譜法（ノーテーション）」をテーマとして、芸術資源研究センターの発足時から継続しているプロジェクトである。当初の研究テーマは「西洋音楽の記譜研究―書かれたものと響くもの」であり、2017 年度からは「音と身体の記譜研究」を研究テーマに設定している。

本研究プロジェクトでは記譜法（ノーテーション）の概念を、演奏し、記録するための、いわゆる「楽譜」という枠組みにとどめてはいない。「書かれたもの（スクリプト）」を手がかりに、人類学者のフィールド・ノート、民謡の採譜（トランスクリプション）、音声の録音記録、身振りや舞踊の記譜などをも対象としながら、記譜法を幅広い視野から捉え、考察することを目的としている。2020 年度は新たにポピュラー音楽の研究者を共同研究員に加え、新しい角度からのアプローチも試みることにした。

本プロジェクトでは、これまで様々な研究領域、研究テーマをもつ研究者を共同研究員として招き、定期的に研究会を行いながら、各々の専門領域から「音と身体の記譜」について多角的に検討、議論しながらプロジェクトを進めてきたほか、外部から講師を招いてのワークショップや講演なども度々行ってきた。今年度はリュート奏者の笠原雅仁氏にお越しいただき、「リュートの『音と身体の記譜』～休符の存在しない楽譜、リュートタブラチュア」と題して、リュートのタブラチュア（奏法譜、タブ譜）に関するお話を伺った。これは当初、年度内に開催を予定していたワークショップを延期する代わりに、2月に開催したオンライン上の研究会で講演をしていただいたものである。

内容は、リュートの歴史と変遷（16 世紀から 18 世紀）、時代によって異なる楽器と様々なチューニング、地域ごとに異なるタブラチュア（記譜法）の違いとその仕組み、同時期（17 世紀）のバロック・ギターのタブラチュアとの比較に続いて、16 世紀のリュートのタブラチュアを中心に、舞曲（パヴァーヌ）や声楽曲（シャンソン）の伴奏楽器としての用例、声楽作品のリュート編曲の事例と多岐にわたるものであった。

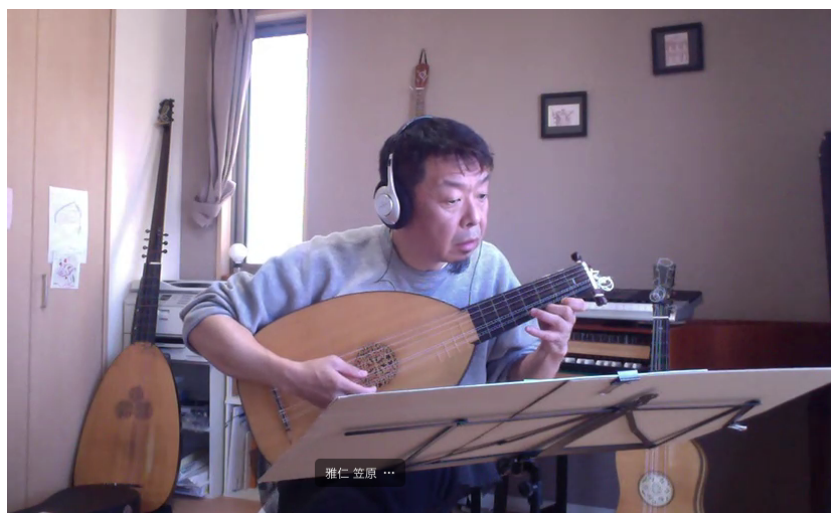
休符は音楽的な句読点と言い換えることができようが、講演の中心的な話題となった時期の、休符の存在しないリュートのタブラチュアには、その句読点の場所が明示されていない。それゆえ、演奏する際には、その隠された句読点を探し当て、適切な形でリアリゼーションをしなければならない。適切に再現するためには、楽器の（発音されてすぐに減衰していく）特徴や休符を書き込まない記譜による実践の背後にある、その時代の音楽家であれば身体に染み付いていたであろう習慣に対する知識が大切である―例えば、声楽作品の編曲であれば、原曲の歌詞の韻律を知った上で取り組む必要がある。後代になればなるほど、誤読を避けるために、できるだけ多くの情報を譜面に書き込むようになるが、それと比較すると、講演で主に取り上げられた 16 世紀から 17 世紀にかけてのリュートのタブラチュアは、一見すると休符を記すことのできない「不器用な記譜」ではある。しかし、今回の講演を通して実感したのは、休符がないということは、当該の時代においては、それを記譜しなくても構わなかったということの意味するということである。様々な情報が幾重にも織り込まれたリュートのタブラチュアの譜面を「読み下す」ことは難しくもあるが、同時にそこから浮かび上がるテクスチュアの綾を考える機会ともなった。笠原氏の講演は、ときに実演を交えながら、質疑応答も活発に行われ、全体で 2 時間を超す非常に充実したも

のとなった。いずれ時機を得て、延期した公開ワークショップの開催を期したい。

今年度は「記譜法」に関する理論的な枠組みを構築するという目的を掲げ、各研究員の専門領域と関心に結びついた先行研究の内容紹介（翻訳紹介）とその批判的考察・討議を重視することとを予定していた。しかし、コロナ禍という状況に直面してしまったために、年度はじめに予定していたような月例研究会の開催ができず、結果的に大学の後期授業が終了した2月に、オンライン上で集中的に開催せざるを得なかった。研究会の開催ができなかった理由は、筆者をはじめとして、所属する各研究員が本プロジェクトに関わることができる時間が減少してしまったことが大きい。積み残すことになってしまった課題は、次年度に改めて取り組みたい。



2月6日オンライン研究会の様子



リュートの実演をする笹原氏

竹内 直（芸術資源研究センター非常勤研究員）